

進路・学習指導を円滑に行うための……

面談を成功させるポイント

個別指導の必要性が叫ばれる今、面談の重要性は以前にも増して高くなっている。面談は教師による生徒理解の場であり、生徒の自己理解の場である。

その二つがうまく機能したとき、生徒は自分の進路を考え、目標に向かって進み、教師はその後押しができる。

面談で大切なことは、3年間を見とおした計画を立てて行うこと、その学年・時期に合った指導目標に則して行うことである。それでは、具体的に面談のテーマにはどんなものがあり、そこではどんなことに注意すべきなのだろうか。9のポイントに分けて考えてみたい。

1 point 面談の目的と役割を明確に

面談は、教師が生徒を理解する場としてはもちろん、生徒が自分自身を知る機会としても大切である。以前なら一斉指導で「こうあるべきだ」といえば、生徒集団を一つの方向に動かすことはある程度可能だったが、今は面談などの個別指導で生徒1人ひとりの心の中に入っていかないと、生徒がなにを考え、どうしたいのかがわかりにくく、生徒を動かす指導も難しいようだ。また、今の生徒には、自分から話す

ことが苦手で、なかなか自己の希望や意思を表現できない者も少なくない。面談はそういう生徒の言葉に耳を傾け、本音を知る機会でもある。さらに、大学入試制度が複雑になり、一斉指導だけでは生徒1人ひとりのニーズに対応できないといった事情も、面談の重要性を高める背景になっている。

面談は、わざわざそのための時間を設けなくても行える。掃除のときや授業の終わったあとなど、ちょっとした

2 point

3年間の面談計画を立てる

3年間を見とおして面談計画を立てれば、3年間の面談の流れが見えてくる。各時期の面談の位置づけが明らかにもなり、それぞれを有機的に結びつけて面談を行うことができる。また、その計画を年度の初めなどに生徒に提示すれば、生徒自身も自分がどのような目標、流れの中で動くべきかを理解できる。面談を充実した、効果的なものにするためにも、できれば3年間の

面談計画を立てておくことが望ましい。面談計画作りは、まず各学年・各時期ごとの学習指導の目標、進路指導の目標を明らかにすることから始まる。目標が決まったら、その達成に向けて生徒を効果的に支援するタイミングで面談を実施するよう計画を立てる。文理選択や3年次の科目選択など、重要な行事に合わせて面談を行いたい。指導目標は、学習指導に関しては各

教科の学習指導要領や教科書があるので比較的目標を立てやすいが、進路指導の場合はマニュアルのようなものがないため、目標設定は高校独自の視点のものとなる。一般に進路指導の大きな流れは、1年次は生徒自身の自己理解と職業観の育成、2年次は学問・大学の研究、3年次は志望校の決定というように位置づけられている場合が多いので、これを念頭に進路指導の目標を立てるとよいだろう。

進路指導は、将来設計も含めて自分がどう生きていくかを考えさせ、目標に向かって努力させることであり、それだけに時間はかかる。1年次からの

	面談のテーマ	進路の目標	学習の目標
1年次	1学期 生徒理解のための面談 <職業研究>	基本的な生活習慣の確立 なりたい自分の研究	予習復習(能動的な学習スタイル)の定着
	2学期 職業研究の結果を基にした面談 <文理選択>	自己理解と進路情報の活用	主要教科の基礎力養成
	3学期	進路の方向決定(文・理/4年制大・短大・就職)	基礎学力強化・得意科目の養成
2年次	1学期 しきり直しの面談	生徒の文理類型に対応する学習習慣の確立	基礎を応用する力の伸長 不得意分野の把握と克服
	2学期 <学部・学科研究> 学部・学科研究を基にした面談	学部・学科研究とそれに対応する学習の定着	得意科目の養成 テストを軸とした学習スタイルの確立
	3学期 入試を意識させる面談 <大学研究>	志望学部・学科の決定 受験を意識した科目選択	受験勉強スタート
3年次	1学期 志望校と志望校合格のための計画の確認	志望校(群)の確定 入試情報の提供	志望校対応学力の養成 基礎学力の最終チェック
	2学期 受験校決定のための三者面談 メンタルケア	受験校の決定	実践応用力の養成 センター試験対策
	3学期 センター試験後、出願のための面談	出願指導 センター試験後のフォロー 入試終了後のフォロー	2次試験対策 最後(後期試験)までがんばらせる

面談のテーマ欄の内は、進路に関する生徒の取り組み例を示す。

場面で生徒とコミュニケーションを図る、それも面談の一つの姿である。たとえ時間が短くても、そうした機会はあるべく多くとりたい。その生徒が別段問題を抱えていないような場合でも、気軽に話ができる場を作っておくのは大切なことといえる。

生徒理解、自己理解を目的に
生徒の気持ちに耳を傾ける
日常的に気軽に語りかける

積み重ねが大切な取り組みなので、進路指導の目標は3年間の流れを大切に、一つひとつ積み上げるような観点で設定したい。

面談の実施にあたっては、学校や学年全体で「面談週間」といったものを設けると実施しやすくなる。ただし、複数の教師のスケジュールを調整して日程を決めることは簡単ではない。大まかに時期を設定して、個々の教師が柔軟に計画を立てられるようにするとよい。そうすれば、生徒の意欲などを見ながら、その面談週間の中の適当と思われる時期に、実施することもできる。一般的には、面談の時期は、1年次は年度初めと2学期、2年次はプラス3学期、3年次はプラス大学入試センター試験後に行うことが多いようだ。しかし、中にはこれだけでは足りない生徒もいるので、point1にあるように、ちょっとした時間を見つけて簡単な面談を随時行うようにしたい。

3年間を見とおした面談計画を
面談計画を提示して、意識づけ
指導をフォローする時期に実施
進路指導の流れに留意した内容で
面談週間などを設ける
スケジュールは柔軟に

4 生徒の言葉を引き出す

point

面談は教師と生徒とのキャッチボールであり、お互いに言葉のやりとりがあつて初めて面談が成り立つ。しかし、話をしながらない生徒の場合、教師からの一方通行になりがちである。まず、生徒の警戒心を解いて、なんでも気軽に話せるような雰囲気作りを心がけたい。特に初めての面談では、生徒の関心のある話題から切り出すのも一つの方法だろう。そして、生徒の話に耳を傾け、生徒が話し終えるまで、会話を遮らずに最後まで聞くようにしたい。

また、生徒のよいところを見つけ、ほめて自信を持たせることも大切だ。それだけでなく生徒は、面談で悪い点を指摘されるのではと多少不安になつている。そんな心理状態のときに批判ばかりしては逆効果だ。逆にちよつともよい点を見つけてやれば、生徒は心を開き、前向きな気持ちになる。面談が終わったとき、「面談してよかった。これからがんばろう」と今後の方向性が見えてくるような、明るい気持ちで終わられる面談にしたい。

面談を進めるにあたって、面談シ-

point

3 要点を押さえた事前準備

面談では、教師が前もって生徒の性格、成績、適性、志望などがある程度把握して臨めば、限られた時間で実りのある、効果的な面談が可能となる。

生徒把握に利用できる材料として、「進路希望調査」「学習状況調査」「生活習慣調査」「模試の成績推移表」「職業研究・学部・学科研究」大学研究で生徒がまとめた研究成果などが考えられる。学年・学期のそれぞれの時期に合わせて、これらの材料を適宜有効に使うようにしたい。また、面談シートを渡し、事前に質問事項について生徒に書かせておく方法もある。これなら生徒も面談で話題になることがわかるため、「なにを聞かれるのか」と無用な不安を持つことがないうえ、事前に面談で話す内容について考えることができ、主体的に面談に臨むことができるというメリットもある。

面談前に、学年団で指導法や質問に対する答えをある程度統一しておくことも必要だろう。それがないと、「あ

先生とうちの先生では違うことが違つ」と生徒が動揺することもありうる。

面談のスケジュール調整では、教室に面談日を時間ごとに区切つた表を張つておき、各生徒に希望時間帯に名前を書き込ませていく方法がある。生徒同士で時間調整をしてくれるので、スケジュールが組みやすい。また、意図的に空き時間を作つておくと、予定変更があつた場合も対応しやすくなる。

面談シートに盛り込みたい項目例

学習について	生活について	進路について
<ul style="list-style-type: none"> 得意科目、不得意科目は? 勉強のしかたがわからない科目は? 家庭での勉強時間は? 目標とする勉強時間は? 日ごとの勉強のしかたは? 予習、復習する科目は? 	<ul style="list-style-type: none"> 予備校などに通っているか? 高校生活で悩みはあるか? 家庭で悩みはあるか? 友達関係で悩みはあるか? 	<ul style="list-style-type: none"> 高校卒業後の進路について考えているか? 将来就きたい職業があるか、その職業名は? 進学したい学校はあるか、その学校名は? 進路について親と話し合うか? 進路について親と意見が合うか? 進路について悩みはあるか?

面談前に生徒の状況を把握

面談シートを事前に書かせる

学年団で指導方針を統一

5 学習状況を確認する

point

1年次の最初の面談では、「中学校から高校への学習サイクルの転換」が最大の課題。したがって、この時期の面談も、その理解と実践が大きなテーマとなる。高校は中学校と比較すると、

授業の進度が速い、科目の内容が難しい、自宅学習をしないと授業についていけない、テストが多い、などの点が異なる。これらをクリアする決め手は予習にある。授業を聞くだけで理解できた中学校時代と、予習をしなければ理解が難しい高校の授業の違いをしっかりと認識させたい。そして、現在どのような自宅学習を行っているかを確認し、今後の学習法をアドバイスするなど、能動的な学習スタイルを定着させるような面談を行いたい。

2年次の面談では、学習習慣が定着できなかった生徒に特に注意を払いたい。国・数・英を中心に1年間の定期テストや模試の成績をグラフ化するなど、生徒に分析させ、具体的にどの科目のどこが悪かったのか、どこでつまづいたのかを気づかせる。自分で気づくことが重要なので、学習内容を客観

的に振り返らせながら、生徒が自ら考え、方向性を見つけた後押しをする。教師は、あくまで勉強法のヒントを与えるというスタンスで臨みたい。

学習習慣の問題点を探るチェック項目例

全教科共通	英語	数学	国語
<ul style="list-style-type: none"> 予習をしているか 授業に集中しているか。板書を写すだけで終わっていないか 予備校、塾中心の受け身の勉強になっていないか できなかったところをもう一度チェックしているか わかるところ、わからないところが区別できているか 	<ul style="list-style-type: none"> 文法、英作文に苦手意識を持っていないか 予習では単語を訳すだけでなく、文意を読みとろうとしているか 逐語訳にとまどっていないか 声を出して読んでいないか 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習で問題演習をしているか 問題を解くとき、計算過程や結論まできちんと書いているか グラフや図形を描いて考えるようにしているか 	<ul style="list-style-type: none"> 漫画以外に本や新聞を読んでいるか 古文で辞書を使う習慣がついているか 古文、漢文の文法や口語訳に苦手意識を持っていないか

1年次で学習習慣を確立できていないと、2年次で学力差がさらに広がり、そのまま固定化する恐れがある。1年次の成績データや面談を通して学習習慣が未定着の生徒の問題点を探るとともに、2年次の早い時期に学習・生活習慣を定着させたい。

高校の学習サイクルに転換
自分で課題に気づかせる
学習内容を振り返らせる

6 進路について考え始めさせる

point

トなどの資料が手元があれば、その生徒の姿が大体つかめるので、回り道することなく本題に入ることができ、しかも突っ込んだ話ができる。面談のとき、話を聞きながら教師がメモをとると警戒心を抱き、構えてしまう生徒も多いようだが、生徒に提出させた面談シートなどに書き加える程度であれば、抵抗感を持たれることも少ない。これも面談シートの効用の一つといえる。

ある問題について話し合うときは、教師の側からいくつか解決策を提示するにとどめ、最後は本人の責任で決断する姿勢を促すようにする。教師はあくまで、アドバイスをするというスタンスで臨みたい。中学校までは親や教師の影響が強く、受け身の姿勢が身についていることが少なくないが、進路選択をはじめ後は自分の主体的決断が求められることを折に触れて理解させる必要があるだろう。

教師からの一方通行に注意

よいところを見つけてほめる

自分で決断する姿勢を育てる

進路について考え始めさせる

point

進路を考えさせる面談のテーマに、

1年次では職業研究を踏まえての文理選択がある。これらは、生徒に事前に十分調べさせてから面談したい。進路指導で大切なのは、なにより生徒が「自分の頭で考える」こと。教師側が資料を用意して与えるだけでなく、生徒自身にも自分の力で資料を集め、自分の頭で考えさせるようにする。

職業研究の目的は、生徒に就きたい職業を考えさせ、そのためにはなにをすべきか認識させて、実現のために前向きに努力させることにある。就きたい職業といっても、ほとんどの生徒は職業について深く考えたことがないため、この時期に出てくる職業名は教師、医師、看護婦、新聞記者といった、主だった職業しか知らないかもしれない。それでも、生徒の「なんとなく、それになりたい」という素朴な願いを大切にしたり、そこから職業観を広げてやるようにする。「その職業のどこに興味を持ったのか」と質問の幅を広げていき、「それならこんな職業もある」と生徒の職業観を発展させていく。

職業について考えた結果、生徒はその職業に就くには文理どちらを選ぶ、どんな教科を勉強すればいいか、おぼろげながらわかってくる。それでも現実には文理選択のとき迷う生徒は少なくない。また、数学が嫌いだから文系、理科の成績がいいから理系、といった単純な理由だけで選択する生徒も出てくる。科目の好き嫌いももちろん大切な要素だが、もう一度、就きたい職業と結びつけて選択するという進路選択の原点を思い起こさせ、「なんとなく文系、なんとなく理系」に流されていないか、面談で個別にチェックする。

また、2年次の科目選択は、幅を持たせて多少多めに選ばせた方がいいだろう。「そんなにとつても単位がとれない、もつと少なくするように」と絞り込む方向にはなく、できるだけ生徒が可能性を広げられるようなアドバイスをしたい。

素朴な職業観も大切に

職業を意識させた文理選択を

科目選択は幅を持たせて

7 志望校(群)を選ぶ

point

生徒が、職業研究や文理選択を通して進路を考え始めたら、次は学部・学科研究を行いたい。さらに同じ名称の学部・学科でも大学によって学べる内容が異なることを伝え、学部・学科研究から大学研究へと深めさせる。

それを受けて、2年次2学期から3学期ごろに志望校(群)選びの最初の面談を行う。この段階では偏差値などを過剰に気にせず、純粹に自分が学びたい大学はどこかという観点で選ばれる。その際、あこがれ校2校、実力相応校2校、安全校1校を選ばせている高校が多いようだ。あこがれ校がないと、現状の成績をさらに高めていくという意欲がわかないし、安全校がないと、成績が下がったときに心の支えがないため精神的に追い込まれてしまう危険がある。目標を持たせ、「実現するにはなにが足りないか、どこをどう伸ばせばいいか」を生徒が考え、自己分析するきっかけにもなる。

選んだあこがれ校に対して、「えっ、

きみが？」という顔をしたり、「もっと現実的な大学を選びなさい」というのは絶対禁物。生徒の気持ちを傷つけることなく、最後まで夢や希望に向かって進ませるようにしたい。また、模試の結果などの数値は重要なデータではあるが、その数値を必要以上に絶対視することは避けたい。偏差値は毎回変動する。模試の偏差値はあくまでその時点でのデータであり、その後の勉強次第で大きく変わる可能性がある。このことは3年次の最後までいえる。

志望校(群)を選んだら、その入試科目も調べさせる。その際、あくまで最も受験科目の多い入試方式を基準にするよう指導する。1教科による選抜方式を入試対策の中心に据えると、併願できる大学・学部数がかなり限られてしまう。進路指導の基本は「生徒の可能性を広げる」ことであり、結果的に生徒が自分の進路の幅を狭めることにならないように注意したい。面談にあたって、事前に生徒に志望校(群)に

必要な科目を書き出させて、各大学に共通して必要な科目、そつでない科目を正確に調べさせておき、それを見ながらアドバイスするといいたい。

3年次になったら、1学期の面談でまず志望校の再確認を行う。この時期にまだ志望校が決まっていけないということは、極力ないようにしたい。決めている場合でも、将来就きたい職業や、そこでなにかやりたいのかという観点で選んでいるか、もつ一度確認する。そして、3年次の11月から12月に行う三者面談で受験校を最終決定する。この時期になるとあこがれ校を捨てようとする生徒が出てくるが、現役生は受験直前まで成績は伸びるので、簡単にあきらめる必要はないと励ましてやりたい。また、挑戦する気持ちが弱く弱気になれば、安全校と思われていた大学に合格するのも難しくなるかもしれないことを、理解させたい。

受験校が決まったら、日程が重なり、無理なものになっていないかな

また、3年次で受ける模試の成績を時系列の表にするよう1学期に指導する。学習の結果を、実際に自分の手を動かして検証することで、生徒自身が自分の弱点を発見し、解決への努力を積み上げていく契機になる。

3年2学期以降の面談は、精神面のフォローが大きな要素を占める。夏休みの計画倒れ、模試の不振、学習面のスランプなど、いろいろな要素で精神的に落ち込みやすい。その原因を分析する一方、「現役は最後まで伸びる」といい聞かせて、後期試験も考えに入れ、最後まであきらめずがんばらせる。

2年3学期に受験勉強のスタートを年間計画と週間計画を立てさせる
「最後まで伸びる」と励ます

8 合格に向けた受験指導

point

センター試験が1月に実施されることを考えると、3年生になった時点で既に入試まで1年を切っていることになる。したがって、2年3学期が実質的に入試1年前であり、この時期が受験勉強の事実上のスタートである。2年3学期の面談でその確認をし、受験生としての意識づけをしたい。

入試は、得点源となる科目を持っていく方が有利である。傾斜配点、得意科目優遇などが多く取り入れられている現在の入試制度ではなおさらだ。したがって、志望の学部群の重点科目に重きを置いた学習の必要性を説くとともに、苦手科目は総合点の足を引っ張らなければよいというアドバイスも必要だろう。ただし、苦手科目を放っておくと、その中の苦手分野が雪だるま式に大きくなることに注意させたい。

また、2年3学期、もしくは3年1学期の面談で、志望校合格のための学習計画を立てさせる。学習計画は、年間(長期)と週間(短期)を作らせることよ。年間計画で1年の流れを、週間計画で学習のリズムをつかませる。

必要な科目を書き出させて、各大学に共通して必要な科目、そつでない科目を正確に調べさせておき、それを見ながらアドバイスするといいたい。

3年次になったら、1学期の面談でまず志望校の再確認を行う。この時期にまだ志望校が決まっていけないということは、極力ないようにしたい。決めている場合でも、将来就きたい職業や、そこでなにかやりたいのかという観点で選んでいるか、もつ一度確認する。そして、3年次の11月から12月に行う三者面談で受験校を最終決定する。この時期になるとあこがれ校を捨てようとする生徒が出てくるが、現役生は受験直前まで成績は伸びるので、簡単にあきらめる必要はないと励ましてやりたい。また、挑戦する気持ちが弱く弱気になれば、安全校と思われていた大学に合格するのも難しくなるかもしれないことを、理解させたい。

受験校を決めるにあたっては、保護者の理解を得ることが大切な要素になる。保護者が生徒の希望をきちんと理解し、それに対してどう考えているかを確認する場が三者面談である。多くの場合、最後の三者面談は3年2学期末に行われ、志望校が決められる。

三者面談の進め方で注意したいのは、その場の主役はあくまで生徒ということだ。教師が質問するときは、その質問が生徒に向けられたものか、保護者に向けられたものか、はっきりさせながら進めていきたい。生徒が答えるべきことを、「うちの子の希望はこうなんです」と、代わりに答えようとする保護者も少なくないようだ。しかし、進学するのはあくまで生徒であり、生徒の希望を中心に結論を導くようにする。むしろ保護者には、教師と生徒とのその場のやりとりを横で聞くことで、生徒の希望を確認するというスタンスに立つてもらつような面談の進め方が望ましい。進路に関する親子の会話が希薄な家庭も多いため、子どもの率直な希望を横で聞くということだけでも、

保護者にとっては大きな意味がある。ただし、学費や下宿した場合の生活費などについては、保護者の関与がもちろんな必要である。特に経済的な問題について、プライバシーに触れない程度に三者面談で取り上げることになる。

3年2学期の時点で、志望校に対する生徒と保護者の考えがあまりにかけ離れていると、後々トラブルになりやすい。経済的な問題のほか、子どもを遠くに行かせたくないなど、学力とは別の観点が原因の場合もある。少なくとも3年1学期ごろまでに、親子の見のくい違いをなくしておきたいので、3年次の早い時期から保護者と面談の機会を持つのも一つの方法である。

三者面談を一つのクラスだけが行うと、ほかのクラスの保護者が不安を抱くことも考えられる。学年団で「大体この時期に三者面談をしましょう」とある程度の方針の統一も必要だろう。

受験校への保護者の理解を得る
三者面談の主役は生徒に
経済的問題なども話題に

9 三者面談で受験校を決定する

point

偏差値を過剰に意識させない
あこがれ校を設定させる
生徒の希望を否定しない
受験科目の多い方式を中心に
最後まであきらめさせない
入試日程をチェックする

志望校記入用紙(例)
生徒に志望校(群)を選ばせたら、その入試科目なども自分で調べさせる。自分で調べれば、入試科目の少ない受験方式を選ぶと、併願できる大学・学部が激減することに気づく。また、志望校を変えたとき、対応が難しくなることにも気づかせることができる。